

海景

眩いばかりに白くきらめく海面は
あくまで穏やかな表情をして
潮はちょうど止まっているらしい

(祈りとは、この雲母のようなもの)

ひたひたと浜をなめる透き通った水を通して
反射を失い、ひとつずつ映し出される
万華鏡のようにつやつやとした淡い色彩

質量のない、美しさという粒子の雲が
碧い波紋の記憶を薄らいだものとしてゆき
無感覚な奥行きへと還元する

(単なる関数記号としての「わたし」)

「汚らわしい欲望から遠ざかること——」
かつて大いなる箴言が記された碑の前で
交尾し、互いの美しさに打ち震える者たちの透明な亡霊

借り物の肉体を脱いだ者たちよ
その生命の望み行く先を見よ

長い年月を過ごすということ
ただそれだけであるということの意義

足元にうち顫える草
その株元に身を寄せる砂粒

何もない、ということの巡礼の道
小舟に乗り、朽ちてゆくことの法悦

無数の微小な破裂音の集合体と共に
打ち寄せる白い泡の列は黒い砂の中へ消え
私は微かな意識を取り戻す

弱々しい風によって吸い取られ
少しずつ運び去られる温もりの記憶
痛みを伴わぬ憔悴が眠りを誘う

揺らぎ、そして、重なり——
その干渉作用の渦の中へと
無感覚のままに吸い込まれてゆく

実は
無意味な生というものが在るのかもしれない
どのような弁護も通用しない生というものが

(私は答えを求めない)

(2014.10.30)